



第9回東アジアインクルーシブ都市ネットワーク（EA-IN）ワークショップ

インクルーシブ都市のソーシャル・イノベーション

参加報告書



主催

National Housing and Urban Regeneration Center

Social Housing Advocacy Consortium

The Organization of Urban Re-s

共催

大阪市立大学都市研究プラザ

National Taiwan University Graduate Institute of Building and Planning

2019年9月4日～2019年9月6日@台湾台北市

特定非営利活動法人エス・エス・エス 東京支部 石川幸太

【第1日目 9月4日（水） フィールドトリップ】

○林口世大運選手村社会住宅

(Social Housing in Linkou's former Universide Athletes' Village)

<社会住宅の居室>



林口世大運選手村社会住宅は、台北ユニバーシアード競技大会選手村として利用されたのち、住環境の整備や都市機能の活発化などを目的とし、社会住宅（公営住宅）としてその役割を果たし始めました。計画がすべて完了すると、4つの地区に計34棟、合計3490戸の住居が利用できるようになります。低所得者向けに安価な家賃で住宅を提供できるほか、困難を抱えた居住者に対しては

林口訪視員（巡回相談員）が定期的に訪問して、その居住者と一緒に問題を解決していく仕組みも兼ね備えており、台北市政府は今後もこのような社会住宅を増やしていく方針です。

<林口訪視員>



<林口社会住宅外観>



○婦幼安置培力服務計画

(Shelter and empowerment project for women and youth children)

<シェルターの一室>



DV被害から逃げてきた女性や子供向けのシェルターも林口世大運選手村社会住宅の中に備えられています。シェルターで生活をしたのち、申請に基づき、最長2年間無償でこの住宅を利用できます。（光熱水費自己負担）ここで生活を送りながら、経済的にも心理的にも自立した生活が送れるように、専門のソーシャルワーカーが寄り添って支援を行います。

<DV被害者の困難な状況>



<こども食堂として活用される場所>



○育成蕃薯藤レストラン

(Sweet Potato Vine : Mentally Disable)

<ランチビュッフェ>



昼食で利用した育成蕃薯藤レストランは、障害を抱えた方たちが配膳や調理などを行う、いわば就労継続支援事業B型のような機能を有しています。現在調理工場とホールで合わせて19名の身体障害者と知的障害者が働いています。またオーガニック食材をメインに使用することにより、多くの利用者から高い評価を受けています。障害を抱えた方たちが、ここで働くことで自信を持ち社会の中で生き活きと生活できることを目指しています。

中で生き活きと生活できることを目指しています。

<支援団体職員>



<レストランの看板>



○興隆住宅

(Xinglong Public Housing Block2)

<興隆住宅入口>



興隆住宅は、1960年代に低収入戸（生活保護世帯）向けに建てられた家賃免除の公営住宅を改築、整備した住宅群です。改築にあたり重視されたのは、以前のような劣悪な住環境からの脱却と託児所や介護施設、障害者向けグループホームなどを住宅の中に併設することで誰もが包摂される大きなコミュニティを創り上げることでした。これらの施設以外にも、誰もが利用

できるコミュニティスペース、農園、運動場など住民同士または住民以外の人々との直接的な触れ合いが可能な場所を多く有しています。若い人たちに安価な家賃で住んでもらいコミュニティ発展のためのアイデアを出してもらう「ユースイノベーション計画」も進行中です。

<障害者施設の様子>



<高層階にある運動場>



○南機拌飯

(Nanji Rice)

<施設内の様子>



南機拌飯は、荒廃し使用されなくなった市場の跡地を利用して、子供から高齢者まで幅広い年代層が様々な活動を通じて交流ができる空間です。その地域に住む女性が食材を持ち寄って弁当を作り高齢者に届けるサービスを行ったり、子供たちが集まり木工作業を行ったりと、この地域において、住民同士が多様な活動を通じて交流し人生を豊かなものにできる場所であると言えます。

○重修旧好

(Chong Xiu Jiu Hao / A Clean Well-lighted Place)



このカフェは台北市政府と人生百味（生活に困った人々を支援する団体）が運営しています。生活に困窮したり、人生で挫折を味わい未来に希望が持てなくなったりした人々が集い、休息し、他者と交流することで自分と向き合い、また支援者に支援を求めることで、未来に向かって新しい一歩を踏み出すための空間です。カフェの中に誰でも無料で使えるシャワールームや洗濯機、台所、フ

リースペース、リラックスルームなどが併設されていて、台北駅の近くにあることから、毎日多くの人が利用しています。

<洗濯機の案内>



<「誰も排除しない社会を創る」>



○続食計画 2.0 惜食中途島

(Food Sharing 2.0 AntiGaspi Depot)

<方理事長>



目標としています。

提携するスーパーマーケットやレストランから消費期限が切れていないが事情により廃棄せざるを得ない食料品を集めて、宜蘭、基隆、台北、新北、桃園の5都市にあるフードバンクを通じて必要とされる人々に送り届けています。毎週約5000キログラムの食糧を取り扱っています。今後は、街頭に機械を設置して、誰でも簡単にフードバンクに集められた食料を手に入れられるようにすることを

【第2日目 9月5日（木） ワークショップ】

○「国家レベルの専門責任機関はどのように都市の再開発に対応していくのかー信義区の児童福祉基地を例として」

発表者：林啓賢/国家住宅及び都市更新センター



国家住宅及び都市更新センターは、政府の社会住宅の運営管理と政府が促進する都市開発政策のサポートをする行政法人です。企業を誘致し、幼稚園などの児童福祉機関を整備して、次世代の都市開発モデルを計画から実行に移していく方針。都市開発を行うにあたっては、地域住民が積極的に討論に参加できる仕組みを作っています。

○「地域住民を対象とした防災教育プログラム」

発表者：佐伯大輔/大阪市立大学大学院文学研究科



大阪市立大学都市防災教育研究センターでは、大阪市に居住する住民を対象とした防災プログラムを開発し、「コミュニティ防災教室」という名称で講義を行っています。講義の結果、知識や備えの程度が改善されたが、近隣住民との人間関係や災害に対する不安については顕著な変化は見られませんでした。今後も、プログラムの精度を上げていく努力をしています。

○「都市コモンズのための京義線公有地運動：構造的排除、都市難民、そしてコモンズ」

発表者：キム・サンチョル/都市転換ラボ



京義線の公有地は、日本時代に建設された京義線の敷地にある空間です。1997年の通貨危機以降、ソウル市は公有地を再開発し収益を上げることを第一の目標としましたが、この過程で都市コミュニティが破壊され、これに対して住民が反対活動を行うようになりました。都市転換ラボでは、この一連の反対活動の参加をしてきました。京義線公有地が持つ開放性と可能性が、コモンズという形態で発揮されつつ

あります。

○「都市再生の水平的ガバナンス構築に向けたメディエーター教育および訓練の必要性」

発表者：イム・ドンウク/韓国外国語大学

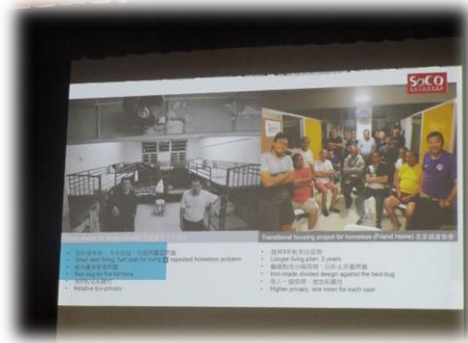


注力しています。

都市開発は主に行政が進めていきます。「官」がその政策を「民」に強要し、「民」が指示に従わない場合、制裁を科すなどしてきました。このような垂直的な統治システムから脱却し、水平的な統治いわば「協治」を推進していく必要があります。そのために、「官」「民」「非営利団体」の意思の疎通を行う「メディエーター」を育成しなければなりません。そしてそのためのプログラムの開発に

○「香港における社会住宅の挑戦」

発表者：陳国光/香港社区組織協会



要望していくことを考えています。

適切な住まいを得ることは基本的人権であり、住宅を国民に提供することは政府の責任です。政府は貧困に陥っている国民に対して公共住宅を提供しなければなりません。急速な供給は無理なので、「過渡的住宅」いわば公共住宅が空くまで住むことのできる住宅の整備が必要とされています。その整備のために、政府が所有する未使用の土地や空間を過渡的住宅のために利用させてほしいと

○「始興市の児童居住貧困問題を共に考えるー正往地域の児童居住環境の改善のためのネットワーク活動ー」

発表者：ソン・ヒョンミ/正往総合社会福祉館館長



います。

正往地域は、最低基準に満たない部屋で生活している子供の比率、高い家賃、劣悪な住居環境など、居住支援を講じなければならない状況が続いています。これらの改善のために、官民のネットワークを構築し活動を行っています。今後は、国レベルでの児童住宅手当の新設、子供の安全と健康のための施設、空間、プログラムを他の福祉政策に優先して行うことなどを提言として挙げたいと思

○「施設福祉から居住福祉への転換点における SH 公社の寄与」

発表者：チョン・ソンヒ/ソウル住宅公社



していきたいと考えています。

近年、ニューヨークのホームレス向け住宅や日本のサービス付き高齢者住宅と同様に、韓国でも支援付住宅の必要性が高まってきています。ソウル住宅公社では2016年に、アルコール依存症の方、発達障害者、精神障害者向けの支援住宅のモデル事業を開始しました。利用者満足度調査の結果、高評価を受けており、今後も地域住民の理解を得ながら、支援の質を高めて支援住宅の拡大を目指

○「団地の住戸を活用した“笑顔のくらし”に向けた取り組み」

発表者：吉本馨/大阪府住宅供給公社



大阪府住宅供給公社が管理運営する杉本町団地では、NPO と連携して、障害者が調理・配膳を行い地域住民が交流できる「みんな食堂」をオープンしました。公社の理念である“笑顔のくらし”を地域住民に届けるために、このようなコミュニティを今後も作っていき、「住宅」の供給だけでなく「生活」の供給へと事業を拡げていきたいと考えています。

○「台北市公共住宅ユースイノベーション計画ーゼロから始めるコミュニティ」

発表者：旅汎/原典創思規画顧問公司



ユースイノベーション計画とは、新しく建設された公共住宅に自ら応募した若者が住んで、コミュニティ活動を実践することで良好な近隣関係を構築していくことです。このような計画を行うことで、低所得者へのスティグマを解消させること、計画に基づき都市計画がなされることで様々な社会問題の解決が図られることが期待されます。

【第3日目 9月6日（金） ワークショップ】

○「温もりのある居住の実践—新居住モデルの展開と推進」

発表者：Xiao Shu-Yun/台北市政府社会局



台北市では、市民が「住得到（住む場所が得られる）」「住得起（住むことができる）」「住得安心（安心して住むことができる）」という居住の正義を実践できるよう取り組んでいます。台北市としては、社会的弱者に対して、単に福祉サービスを提供するだけではなく、社会資源を有機的に結び付けて一人一人が温もりのある家で生活できるよう政策を実行していきます。

○「FMわいわいの24年、阪神・淡路大震災での気づきを復興の街づくりで顕在化」

発表者：金千秋/特定非営利活動法人エフエムわいわい



1995年に阪神・淡路大震災が発生してから、避難所や全壊した住居跡に「自分は無事である」などの張り紙を見ることができました。しかし、これらの中に外国人の名前を見ることはほとんどありませんでした。神戸市に多くいるはずの在日コリアンの名前がほとんど見られない、すなわち自らの「固有性」を埋没させなければならない日本の状況があぶりだされたと言えるのではないのでしょうか。

「埋没してしまった」在日コリアンへラジオ放送で呼びかけを行ったことをきっかけに、ダイバーシティのための社会革新を試み続けています。

○Difficulties and cases of finding house , lack of jobs for immigration

発表者：Ireshadilani Perarachelessage/Talk-to-me



私は、スリランカで生まれ、21歳でサウジアラビアに渡り、25歳の時に仕事のため韓国に渡りました。その後韓国人男性と結婚して韓国で暮らしています。現在は移民女性を支援する団体を立ち上げ、文化体験プログラムを実施するなどしています。移民女性は単に福祉サービスを受ける対象であるだけではなく、積極的に社会に参加する国民の一員になるべきだと考えています。

○「ホームレス/社会的弱者グループのための新しい社会集団構築:繋がり作りの共住計画」

発表者: Wai Ling-Shin, Angel/基督教關懷無家者協會



2016年のデータによると、香港では約21万人が狭く、衛生環境が悪く、安全面に問題がある間仕切り住宅で生活をしていると言われています。これらの住宅に住んでいる低所得者に対して、適切な住まいを提供するために、教会を中心に様々な支援団体と連携しながら、生活支援・居住支援を実践しなければなりません。

○「共住共生 香港低所得一人親世帯の過渡的社会住宅」

発表者: MAK Yee Ting/聖雅各福群会社会房屋組



す。

私たちが管理する「過渡的社会住宅」は「共住共生」方式で運営を行っています。支援対象は主に子育て中のシングルマザーで、彼女たちが入居期間中に様々な活動を通じて社会資源を主体的に活用できるようにして、コミュニティに戻ることでできる体制を整えることを目的としています。長期的な視点では、香港政府が積極的に公共住宅を供給していくことが求められていると考えています。

○「農を食と職に一小さい農の現場からはじめる未来への挑戦」

発表者: 小島希世子/株式会社えと菜園 代表取締役



現在、日本での生活保護受給者は約210万人、ひきこもり者は約100万人いると言われています。一方で農業従事者は175万人と言われています。働きたいけど仕事がない人や、働くことに一歩踏み出せずにいる人などと人手不足の農業をつなげる取り組みをしています。誰もが自ら望めば農業を食と職にできるような世の中なることを願って今後の事業を続けていきたいと思っています。



【所感】

日本、韓国、台湾、香港いずれの地域も、共通の課題として、生活困窮者や様々な理由により住む場所がなく社会的困難に陥っている人が一定数いること、そしてそのような人々の実数に対して行政が供給している住宅数が明らかに不足していることが挙げられます。そしてその不足している公営住宅を補う形で、民間団体をはじめとする支援団体が居所を提供するだけでなく、各種の様々な福祉的支援も合わせて提供している実態が発表を通じて明らかになりました。

またいずれの地域でも、これらの人々が社会から排除される傾向にあることも理解できました。ではなぜ排除されてしまうのか。その一つの理由が、特に都市部において彼らが「不可視化」されていることにあるのではないのでしょうか。自分の周りに見えないもの、見えなから理解できず、理解できないものを容易に排除する、排除されるからさらに見えない、の悪循環が起こっているのではないかと推察されます。

エスエスエスでは、取り組みの一つとして「エスエスコラム あなたの知らない社会」を定期的に発信しています。自分たちの周りにも困難を抱えている人がいることを社会に発信することは、困難な状況にある人々を「可視化」させ、多くの人にその存在を認知させることができます。そしてそれが誰も排除されない社会の創設に寄与できるものと確信します。

参加して考えたことは、「ソーシャルワーカー」としての自分の立場でした。今回参加したすべての国や地域で、様々な困難に直面している人に対して、地域の中で専門知識を持っているソーシャルワーカーが寄り添いながら生活を送れるような新たな取り組みが次々と実践されていることが分かりました。社会福祉の専門職として、今日の前にいる生活に困っている人たちに対して、そのような人たちが不可視化されている社会に対して、どのようなソーシャルイノベーションを起こすことができるのか、自分の力量と熱意が問われていると痛感しました。

以上